

1 授業の実際

(1) 板書

撮り忘れました。

(2) 生徒の学びの実際

授業中の生徒の発言より抜粋

- 夏の段が「大きい」と「小さい」, 「多い」と「少ない」の対比を表している。どうしてそのような両方の魅力を伝えたのだろう。
 - 比較するのは、後にきている文章を際立たせるためだと思う。蛭は、一見多く飛び交っている方がいいと一般的におもいがちだが、清少納言はぼつりぼつりと光っている方が美しい、と考えているのではないか。雁の部分であれば、「鳥が少ない数で飛んでいる」と書いた後に雁が群れをなして飛んでいるのに「小さく見ゆる」と書くことで、その部分を強調しているのではないかと思う。
 - 対比することで具体的にイメージしやすい。映像として浮かびやすい。
- 自然をメインにしてほぼ人が出ていないので、穏やかな雰囲気を感じることができる。『方丈記』や『徒然草』は鎌倉時代に書かれており、鋭い言葉が多く使われている感じがしたが、『枕草子』第一段は位の高い人たちだけかもしれないが、感じ方に豊かさが感じられる。
- 冬だけは、直接人は描かれていないが、人の行動が書かれている。それはなぜなのか。
 - 『枕草子』は清少納言が書きたいことを書いている気がする。だから、季節によって文量も違うのだと思う。たまたま春から秋は自然の美しさに目が行き、冬は人の動きに目がいったのではないか。
 - それぞれの季節に必ず「動き」が入っている。春なら雲の動き、夏なら蛭、秋なら鳥や雁。冬はたまたま「人間」がきたのでは。
 - 春は自然だけ。夏は自然と虫。秋は自然と鳥。じゃあ、自分に一番身近な人間ならどうだ、と考えて冬と自然と人間になったのではないか。さらに、春から秋は「をかし」「あはれ」だったが、人間が絡むとよくないこともあるということに釘を刺しているということもあるのではないか。
 - 人間には幻想を抱きにくい。春から秋にかけて幻想的な風景を描いていたが、冬に人間を描くことで幻想的な風景から一気に現実に戻すことで、読む人間の心をつかむ効果があるのではないか。
- 「○○は△△」と書くことで簡潔に伝える、というのもあるが、後から詳細などんどん情報を足したかったのではないか。読者は自分にとっての「春はあけぼの」をまず思い浮かべるが、そこからどんどん追加の項目が増えていくことによって「清少納言の春のあけぼの」に触れていくことになる。あいまいな風景から、どんどん情報を増やしていくというグラデーションの効果があるのではないか。
- 似た音や形が何度も繰り返されているが、韻を踏んでいるような感覚になり、読む手にリズムを感じさせることができている。

2 成果(○)と課題(●)

随筆ということを意識させた読みは、生徒に古典の魅力を気付かせたり、内容を深く読ませたりすることに効果的であったか。

- 三大随筆を一つの単位として学習することによって、表現や文章構成、内容を比較し、それぞれの作品の特徴や良さに生徒自身で気付くことができていた。
- 他教科の既習の知識を生かし、書かれた時代の状況と内容をつなげて作品を読むことが自然とできた。さらに、その時代背景が筆者の考え方に影響していると考えた生徒が多かった。
- 「随筆」にも様々な形があることを知り、それが文体や表現の違いに表れると気付くことができた。その違いが生徒の興味を引き、主体的に学習に取り組むことにつながっていた。
- 『徒然草』『方丈記』『枕草子』を「随筆」と意識させたことによって、生徒はジャンルにとらわれてしまい、自由に作品を楽しむという点において十分ではなかったと考えられる。